義殘後覺　五

羊

和書門
類 三四四三二號
二二七 函
一三 架
七 冊

共七

内閣文庫
和 類
三四四三二 號
七 冊
二一〇 函
二三 架

247

内閣文庫
番號 和 34432
冊數 7 (5)
函號 210 163

国立公文書館
National Archives of Japan

一 玄恵法印咄ニ之文

一 碁こゝに針ニ誂謂之文

一 法商人ニ而康石渡ル事

一 本営極の城を攻る事

一 野呂県来ル所ニ而渋谷之事

一 ニ而康石拾之事

一 右円義隆合盛之事

一 一惣軒并小乃御方寂滅之事

付 沿泉深思男体之事

一 織田源五ニ而落候之事
一 明智日向守京都ニて礼を請る事
一 京伏見并ニ江戸ニ相撲之事
一 宝一座記の事
一 楠河内守名代弟小宗陳勇力之事
一 四國撃溪合戦之事
一 日蓮宗宗名改之事
一 漱石源円宗山之法伝受之事

秘閣圖書之章

義満法號之第五
秀吉法印號之事
一或時秀吉公玄旨法印東山法印清須法印
今ハ去ル法印周備是ハ又坊主ニあまてハ云ふ事
かく成りしあり、其ゟ太閤仰ニ是ゟ八ヶ様ノ
ろく成りしを雑法ありてこそ仰にかりしく八
穏ク可乃を取りしともつゝしまかさまいくて
おゝかたの事をたてて候ハ其上候とて候へくの判
然ニ枚ツ当所にハ仰せつけ候とて候也

国立公文書館
National Archives of Japan

ことわれをめしつかはまほしく候と申いかにも志ん
ほり越つくねむしもちはり一言も給不申十を語
出まはれるは我此ふにかりし山請紹鴎へさんと存候
けりさつりにて名茶ふ道具を見せ申候へ休に
中をはめのハ秀吉公よりこうしめしく名茶をゆへとて
其ゆへ出し奥にて仰られしも其一ハ古今に称と乃
ありをはまれく利休の外しをかんとおほせ申けるしうく
茶堂御へ茶とえて中作あらり清し茶釜
そつ申けつき請く拾ゆうくハうへく宮中に於而御

けやしくえんけしくあの釜たくらそ〇かに唐金にて
同中にもつて茶屋中にてあそはしくかを〇ゆくく
なる金の本乃釜をゆく此入候申御わりしあるかぬ候
らしきをは其え入宮前つかやにへ茶をまいらせの床
其く此座に御かりしねとらむいかにも此中さかく
まへて太閤さこうし召してあをかくもの八えまいハ
扇をこけく関白に三百の御わりとのうまく八ころ
うけまうくおはハ備らうあかくいはせやし
判金一枚ないてつしろさま其につき申さて候されハ

大圓主く坊主りしたまひつ流れたまひつらむ
せさ給ひけるをたゝりしこゝろ晴へ年八ある
碁の家手ら挑發く事
一 式取一条殿ご言ふ法印に参らせつゝ御所
一条殿へまかれまししをこゝに所の事は御所れ見まちかれ給
しきくまゝきぬらむとたまふれにまへにこ言ふ法
印かく
碁のいれこゝもすゝめへのゝ焼かうしやかく
言ふ法印

おしゑくゝ日照りしけくる井ホ乃み
藪殿
いりたるくのうち雲皮にてむまの墨
法永法印
たゞ乃吹かりし下に里にけり
蜂
かきうりしをのしくまちかれまいふ言ふ法印い
つまておりしらしけりあつし風りしあふ
一 まくもの熊のかぬゝさ見れ然にものまつゝ飛乃茹
いきゝら

一　諸商人ゟ正廉へ請る事

日本あまたのうちにても異国へ渡り候ハ
又ハ肥前のうち長崎ニ御座有まし八諸人しる
所なり しかれハ其をを将くたん吉ゆうのちとりさうれて
京大坂堺其江伊勢尾張加賀越前中
国四国の諸商人つうらういへ日くつりく諸事の
取月をさたすすつあまし所話中にて紀付き
評まうるありひらうなす小商賈請りまうるま
ハまし渡ちさま達ものれた諸あ商へめんしに

就ては□しく秘さん出てくかくあらうあらひき
衣装武具のことい諸こハ積錦乃ちを物さかり入用ぐ
まのことさとおりのしくりしあしらいへく評中く
まちうまい一八商人へてよろひ商売もろ渡こちあさうを
ここを用ことくしめんしく小売商人もおそき
就りしちろことちろをすあしらへく売を数乃
あらくそ渡りまうる請く異邦り作しらハ
諸大名にさいうくそ仰しく小船数日に付にまかる
本上種々なと攻る事

一 いにしへ琉球国といふハ日本薩摩より三日ほと南の
方に風俗ハ大かた日本のことくにて七月を祝
ありて其外ハ能解ことはもちかひて唐
にも(?)さ女(?)ち数有りて国のかたく大唐
より評議しくいさくさらいにて近所へ
渡ハ一宮を唐へつかはしこの国の事ハよろつ
つかさとらへて大唐へ漢南りうらいのさいを
あまたうたせたしこ評しく頼合松五方
の縁おこして生ける守護を大加勢ニ千にて

小児も到る迄湯ふね七八人ほとのくんせいを辛
しく青うるしにて流りし城の西害よくして二く
術をもつてすりよつて若手の数をそそ
ありて青あるに石垣のこと三三間にし流水
ありきくうつはりにへりくしたりさく門ハ
むかしく二十間井戸乃如く流りまく流り乃
むかしハ出あしたちを立あつてその松の間に
えくいくさく手を主にすさつてあり出て
つねにみをこらしくらく湯汲器を取て湯ふ

まうりやうくんせい以なりを在をとし一世をらく
よわさ閻小ハらむ五十人と六十人も希様より
むくらりしをれく前浮と見そ小あらわ揭を
二ゝなとつり安ゝ十勝とさうらすしく死以ふ
よれく門の内外ゟ死人の山をつきく済
いるつき居らいなしこき卯よは大門法花ら證
達らゝなく以南ゟの何くあいく家つさ安い
なしちりら形めゝ御をほくこのむるを日本
以秀那しさやしてゝなきしもれハ大閤所

氣色あしくゝ在二十万人数佛法さそあまつを
へ落城とす青貴にこむのきらくハも何ひゝ法打く
若方楽らさむ日本勝二十万済一同りし押かけ
廿と現き覚りしいくるすへしゝたるへくて落去
るふおゝくハ京一小空らをかららつきのろしよつく
なしく一軍をとつりまりる一まのすし信つまと
らさそれハ日本勝と分をしく四ゝ方より一同
りしもそも同城と同りゝ志をもへんとて
嵐とをれしせり寸ふまさてくりしたいつとらゝ八方を

細工すりかくし雲に数のこらずふところへいれた
へくしかくしかちに押へられさる所に小早川隆
景並立花左近将監加へらるゝ所なりいかゝせん大将
をたのみて小早川隆景ハ猶あらそひ先陣ありて
一番に駆懸て朝鮮の先手を追ちらし縦横に切まはり
かゝる強兵と戦ひけれハ是をあなかちにせよとなし
て攻けれハ日を経すして城中の軍兵も敗れて国々
の奇特なれハ先陣をいたし敵をさゝへこらへ数
多の首をとつて小早川隆景の高名ハかくれなく誉れ

者として千萬といふ数をしらす其中に隆景
ハ武勇といひ国をおさめ民を撫るといひあいかはらす
いよいよ名誉をそへられける然るに鍋島加賀守直茂ハ
おなしく手負死人のかすをつくしてかゝる
事にきこゆ

黒田甲斐守長政晋州城攻る事

一 金山浦の城を小西摂津守行長請取ける處に
こゝに朝鮮の勢あつまりけれハ是に加へて毛利輝元
の手勢并に甲斐守長政の勢をくはへられる

ハあに一萬ハ九つ、おとゝハ七つなりし
たかちよりふかく所領に工藤祐経とをとかにしける
弁ハ西坂本を神にして本領の一族見物し
へありきありし工藤祐経か与力ニ春乃をと助言し
経ハ野山にいつてハ大きに此事といふる
のゝ為甚をつとめらしを判とする為なりけると
させハ備前すこし太刀ハ射落す由助言
つゝをたまへしこゝろのまゝのあまハ一言にさ
清つをたまへしこゝに言難し経ハあらん

てう助言ありけれと是をかはりにとらへまさしく
かねてこれをすまひあたこいひ、与力たる股河津
うちとる股殺排口ほしくさん見り是を遂しかの
こゝにて此度のたゝかひ候なりさいかそ三株
赤猪もとゆひをかけし股河津をさしく
引出いつくあしくもとちからに切ておとりしく
いりふに工藤祐経かあをも向けしにこへてけり宗
なりし河の与力こゝにたちあれてのく
る。其後祐経の与力同人たちまちに入にけり

そんおとこしりきりあはぬ所ありてすハまこ
とりそなへ候ことにて末々までもつかひしかさねてもちゆる事
後藤宗乗の子光乗のつかひなり上手なりしよりされ
らうせちを法りさつうのまことに曲たる文字のはく
人物をよみとく両にかぎりし一人と沙汰す事なし
祐乗より斤候ほとしりもしるしよしへつかふ
祐乗し後は日本へそのほか此分に家者にも
大文字に傳来しれもあり
石持ちて大文

一 後藤の家にては廉に赤のみあを青き色のさまにて末々まで
すこしも違ひなく押すところにあやまちなきよし
ここに取り一包して大川ありとて
かくれなり日本後藤に百八十両ばかりの持ち主
あまたの石をもちて見よとて長持ちあるによりて
中にありしく一人のありさまなりしところ八十
一日ばかり同じところのまた持ちてよりいて
またかくる事あり一軍記にのって
八ツこれハ大将よりいはれまたありと

みるに嘉のあらくをもくするものさか
きくこれをきくたまりてし一面諸軍をお
をとことしもろくになるをとうちゆるとく二里斗り
行きすとハ紫川とこみえつゝく大河くありきるか
舟こそうしなまじこもここ文にあふうく冊を
あまきとハ冷ころなうしさと紙銭をふせく
此川をいふわを深淺ちと聞へて常ハ千尺
其のうふかふ前あるふかさたりされとも十日
より宿りしてこの川ほりきり清かしふる

なりもたくさりこゝに人のこゝろくたいりてし
聞きれを行ゝ得よりてこゝろり行の毒をうくるし
目えて出給ひ段門ハなりしかうし二千にころく
内行くハこらく又はこ水をも氷のとこへすみをさか
とらくたゆく渡まことに一面に帳帝ハけちうり将
ますまはとこそし深閑小林そんく花とふ
生と行ふみちま又まゝのでと云川あるハ是こそ
地獄のうへの一ほくこ只にまじたゆくこゝろ着こそ
けり一面にまして北まじこい和田ちりし思ひ二面

ちか一戦に押よせしより首を陶晴か
討取にありて酒しも花たる人の首を
とりあへずこしらへの水とほりけるかかりて来る
あるにこれ雷をふしぬけ立すてゝ水ありく
死ありしもうちとけありしも人々同しく返
河里といふ所にかくれありしかば有縁ありし
大内義隆公の死去の文

一 扨又中国周防の山口といふ所にありし大
内と云人こそ義隆と云ものありし此人乃先祖ハ百済
国のあるし琳聖太子の後胤なりしかく
本朝へ渡り給ひて国をさづけられ漢の寺にあり
しを今もありしかば代々国をしたがへて陶山に
こゝろさし同住ありし給ひし此しく文武二
道をかねて黒白をとりて仁義の士なりし博
学よりして君臣ともに大切なりしことしか
ありしに宰相大弐卿の中納言なりし位をも
持ち長門豊前筑前安芸石見国を領して其ほか
なりし事をおひくて九ヶ国を城郭につかさとらせ

まつ周防の山口といふ所に城郭をかまへ
にて國の諸さふらひをしたかへ日々に出仕をと
きそのほかに京都より公家門跡
をはしめ人々あまた下向ありて住所を三条一条より
九條までの條里をうつし東西にわりすまはせ
まことにかんちやうなれは諸國より商人あつまりたい
のありし山口一國繁昌して御ちんたつの堂
こ座すて始まるを深くうやまひよしこう
の住所陶尾張守隆房と云者あり執権を

給りつゝ威を西國にふるひ勢ひさかんなりしは
りゆうこさむしたかへてすなはち氣あらたなりひさしく
反逆のこゝろいてきたくおもひてはかりことを
するゆへにはやく親類并同名のものとり隆房
をとりまきおりて居陸富田乃若山へこもり
ひそかに杉右田青景熊谷清水などをまねき
て山海の路地をこしらへてすくなきを
其不斜角くに氣色をうかゝひすきまを
ねらひてへやかてかんすへきもくまへひそかにあり侍る

されハ義貞ニ当を存せらるゝ事ありといへとも
已に摩尼に入けれハされハとて是非なしと存ハ
ともはかりしかとも宮方ハ法円法印ニ大事の所ハ相図
を定め武任もしるへ少（？）やしき中をさらへハをのく
京一州の守護ハ大内只のとはかりすへて上洛勝乃
余所の所存しなかとてかくのそれしく義貞公
の小太軍を定けしか不用にしなかのゆ第人まち
ともはかりし唐和闘を宗なり罪をなさとし事
うてましく人事ハ国情のなしそれなりしハ合る

せらるゝ一矢射けるに義貞をおさへてとゞく豊後の
大友乃浦人今度ハ御方を申ける大内介をあつかる事
らんここにありいつにこゝろ（？）ハそのし一族の者こ
ふたゝか（？）に同に守りてそのなかとて酒ハ大友なり
鎮めてこれハこゝろく廻らにとなすへてなり清さし
こうに有二ハ我々の北の方からに源氏ちや中志
ら公家河内曽七郎らに右京亮少弐千余騎尾張長
それより門に掃部助是二酒匂監物弘仲同三河守を
宗徒の侍としてて都合七千余騎にて当国の岩山へそ籠

又十七にてこゝに后すまゐつゝ御あやの子なりし御座
こ源氏の御房後に御川花山院殿房録下尾張守なりしむすめく
あかうとなりしか御子出来むかしは又后に入り
隆房の御中へまいりて后に入と申すまゝ
うちとも申つかうまつらせけりしに入道相国文をたまゝ
この君の御うちも御いくつてましまさせはこゝろにさま
あし一条院あわりて又寺の后の所にさいく
優せられおりて中宮をよみてつかまつりて大閤太切り
松殿しゆうもしゆの御あいかうの御そち座主入道

ある時はいにしへ御所の家にしまして太内よりの后にてとよりいかの
の御かう義清のよしかり家の御の御沙汰のかたく
あしきほとにの中しまして御心は昔も一定ともやいらは
それにあつらん御事ありて申せは何も候はず
これもしもしとは御さて又家道御房をふりをれ
御弟つまうれしく御案しよもにはと人しきりく
清こつく御座の御子をとり御申て和漢にしるしける
あかいとは又いちしてある人はこのみ若の身とかり或いは
同家の御所道とのこゝろあのつきりく人とあかりけりとそ

ためにく神ゝを見くゝす只未をとりつくろく一子錦宝の
ぬきし害し給ふ事彼らゝ是々のうつほを
四方のますゝ風呂をもしてす君をまろめさ
まゝへむへくす後漢閏乃を見んさゝく当子ちしか
海なるりしいつさましゝ義経に忠実りしかう
かりを治ひぬちをちらんし治りし君のこ
な射を文の口あるかをり方の治めてこ婦りてし
さあゝゝにちへ亦ちゝこころさへすしくこ八治りん
まうくひらし 当主ハ雁なき山あるさ君

たゝましえてふをを悟思あつきく朽とししころて
諫言し給りき尾張守忠に行くく相り
国をとうこうしの勝をとゝをくまに純家別ね
つまじゆらいなりしかにも治むとて汁節りし并てハ
こゝろまし ことを損しく いきしへハ海野之門
いひきりハいかよらす国家をゝせちきんとてハ忠臣を
かきりたんとも渉て之れ伍子胥ハ刑られ泣く
るいさん既なましハちりてなし こころさて門にはこの
いさめさきれもひねのまつし いさやこえ治ここて

深野ハしろまちかうしちりつくく死ぬることをしまな
者をぬりり出雲陶ハ上と同名なれとも逆心のつき
ぬろうへおれハよしりし上を作為らに作弟ちととく
くろ領を二年にしく山口へうで向後出れ
一悪行并小〓方出家後之事
并冷泉隆豊之に答之事
一義隆ハ士卒をあいれくし能かふかかりし冷泉
ら股化沢国語ほかぞ物ろしくて二百余ありてハ
あろうけとも八雑兵を活ホ二てわずく二百とゝくし

陶の浅名おちへ落ちか宮れかりて文名益しちへ
をちるみいくくのおろうり自害せんとて異雪和尚
をこうて右治くへ八剣異雪和尚いそろうかきちく
截断をくつまいくて一言静に彿内りいしやくつけ
つれとこ一句所望十分りさりし切るいくさ天怪をとゑ
ころうまいい正当恁麼時何落門子つけく
捷者の息徹をはかしふれなるよ浅け寸法書治
一盃とこうへもなつけ浅着をとそいいけりをかかち
受らりし二位の中将義隆十三まうく自害し

すみ中にもあまたありしハ女御更衣之一君
所にあまりしまでにいはきさきの雅の名をとよしくの
とのくさいしきまひちかくし西北の方へくくさ御殿
くすらくに十六年にをよふまて御前面ありしか
ハ御母らくていりえりかわりしまれすらむ日に安来
くるてさ御かわりしみあらふみのりくるん中
たこらふんさんの心とし御湯あちあまく
いそおさかやのしおこいへとと年ありしかれさ御前
ハりふくしていし卅面ありしハ一君所ハさ見

しハ御ひ立らく須弥へかりむすかや源くありし
らふんさんきんとこあるふし春風に御なく
わらやまへハ姫君も源へさいりしかありし
くむつやしきふくくなりかなこくしかふ
御りし母りのおりハ水のあるうてちふく秋と
すりしてかかり物をりしく法ありてさつく
りなうに一門一所をしわるいさふかすかさ
河らわれさいふも河まりはすも一西所にゆ縁と
一所にありかさてかへまちれ北の方ハ御子□

めのとこそ源氏にハ小松殿剣にかけ身をとなりけるなり
あしかりしをその上冷泉院殿ハおもひかへし申こそあり
けしからく文武の才ふかくして渡すりける宮殿のけしき
ならして詠歌を太閤にちかくよせて歌を
太閤ハ殊にきこえ出ほめしかハ手ほどを返して
て付てならしつきぬ世ハ三百人八寸のうち拍ねれ
らく当縁をもとめて八方八分かんとしけるかく
河うつりて宿をかりし上扇の死人ハ門のうちかれに
さんをみえしへつるあそびありけしとふさ

あはれなる詠歌ありといふことなり豊臣一人ハ
切腹させられ関白にさしてそ逝きて罷法ありて
いさゝか軍陣にもあらで君をもとくしに死出の山を
おもふにむかひしかいつくしきこゝろ佛の人のあはれを
合掌して称名をさけびくらうやをすゝめ定を
まぬ人もなかりき中にも死の山をこえけるにハ縁人をと
おさまもいかりよりんくくみな修羅ハ禅定におもむくし
みよしの立縁を雲となり空に流れし気色風の行
あはれまて

こゝろざしハ見しは事すか黄門定家のきゝやう地なられ
こハいひかくしかゝる折ふしに思ひよらましやしこそ
見えてさりしにかし家名をハ後までのこされける
こゝろざしこそあはれなりけるとて心ある人ハ感じ
けり

一 織田源五と云し人の事
始ハ信長公ニ為ニ一門のいとこく信長公の御舎弟
にくらゐ有し時明智ハ本能寺と云ハ西洞院
とおり三条坊門わたりまで志ハゆくまじき

ゆハ西洞院をうちまかりたる時ハあまりにすゝし
都まで勿くする一條邊ニてくにありしたり
後ハ御所すゝまてけハ明智との家臣富田乃
坊ハしらぬ新蔵のうちよく連歌と見えけし
る程より紹巴ハ西ノ房ハ目出度句といふなる
いまやくも紹巴か思ひをとくるよしにて
との本能寺ハ場ハいかほとの者ぐりと云すれ紹巴ハ
西ノ庫にありさてそこの方ハ見なれるといふ
ことなりへハ藪中より林をとつき出す舟のある

てきといひけれは其のきさと聞て云給ひしや
ことかくへは明智とのはかりことをかたりきくれ
ありしかるに有りあうしく返歌に付し公乃
ちゐもあらうて成りて給まへ公ハやむことなく責乃
てつゐをあんしかしき句をつくりける

後日向守

時ハ今天が下しる五月哉

やかてかへし返歌に西坊ハすそ衣にまた公の
宗匠へつかはすもの也此み返句を尋てくうかゝし二百

頼もしきはかゝる時のあはれさかなく三井寺にてひつき
きたるか一年たち行りてかさなり久しくそれ主殺の
勝道にもたてまつひとたる通り伝あるに行けし六月二日の
未明より一万に軍をひきて本能寺を法く責て
爲明さし上京を有もいらぬにやらんと地にあへて
するふりしあるうとこくおこね義あらうてみぎ
ありしそれたしれりのすとかさて酒をまうらは
円りしお京のうり手始さうかたのかねい年とを門
出てとく女をに流あつさらんのなかと小

きさらきに二月も終てこゝ半あれハさいハひにて関く
東西よりまくはれ上をたきてそつゝし北にれ
洛中ハ残所なく町なかりし家をのこりす猶に
ありけり一条より六条辺の近辺あまりなかにたりけり
小おちりく家をしつ不残りけれは
それよりも軍敗して大わらくにあいさるところ
角く本能寺へ帰りし上ハ二条の池の上に有り
御くめさくおりしけれは明智ハすくに是へ押け
かり二条へ御所の中ハ宝町よりとをり二條より

一丁わ中くおりさまさハ本能寺へハ向ふて此方あれは
攻ありけれハ大将ハ之にあまりをさしのかれ城へ向
信長公をとしていつくさんと諸方けりに一方へ向は
なんあまた人をさしおき残りなく光秀
うちをまへ口にも又一方にハつゝらに頁なる所々く無く
内くにもわたりくとは信長本能寺の智にて
うちをさしとくつゝしさたのハ新参のもの中に
りんまうてかハかりし光秀本能寺をつけつ今もこふ
信長公に御しく討死してたりけりしたつ今にいふ所なり

あり爰に織田源五とのハ城介とのにいつしよにありしか陰
義なりけれハかゝる所にてきハちかつきさこそ人々をやく
はなれともさこそ御座候へとて行けれハはかより外は
あつかりしによりて自害のすゝめしまゝ御内から早
更にやさしきの事にて宗のりしきうら上下おのおの中りの人々
少しも源小源のかたへハ安ちをさすしくく洛中をふさて
城之介とのゝ自害あれハありあひ候く有之
みかくし義者とそいかにきかれけるかなりしいかに
はさしめるりもおけりし源五ハ應あるの坊まさかく安

さかおはひそかれて京をしんへ入にてほとなくまいりて云ふ
はかりてこれをひそかに織田源五ハ人てハ存候まゝ清なく
ありしもなく存知くあかたく家ハ安土山にてハ源文
六月二日のあいのいてしかのをそそ名を流すと
云事をとふ子ともに閉りて手つかせくあそひ
ほとゝもうしてひしくしこなり
惟任日向守洛中札建て治められ
一 かくて日向守光秀ハ西国へ出陣なれハ京町中
の者ともにて治りしありけし剣本ちの下河原

にて清水のかへしこにありしかハ景りはこそく云ひしに
とことさらくこしけり或ハ源氏ちまちな餅のくこひ
あれハ松井月堂なとと上下さわりそし又一ちやう
にもいやしきものくさひハ世をも静謐にねさせり
こうへりし上下なるこ後ちんちやうにはこしらく御随
にく清水に参りらそハ御つゝまれまて〳〵り
甲田斗いとよりひ旗さしねゆく一の武具ちかゆり
ちう階ちうひ悪をかりとも出てて紀こる羽の野
原ゆく清水を所に拝まれハつわしいひなこと

然るへきましことて門ハ白を涂くあけらくさいしまる
者ちかくくありて甲も走徒ありし日向中居口は嫌なし栄
執ちと立ちをたたてし申し出進てとの御浴にく門
服さいしとくるとけ信濃くるものさ方ゆめのあとこく
清のお鏡にまふへ土度のくきにかるハ洛中うく祝
清水寺走りしたくてハあらつうて作と寺向名所中
の地子役ちぬうしとへくとの忠源にく免ありる
しこ寺領のいそこて語りかけり

所々にて相撲之事

一、京伏見ニてちんちやうきしりハ清水八右衛門
すまふの芸到来しけるに於ゐて門脇七右衛門
といふ相撲を取けるにちんちんすまふとの如くにハ
立石ふまへしに荒波立つて岩崎よりも橋ちう
あふのけに黒雲北風吹きて〇くらんにちんの如く
南に浅神にて数人三拾人斗ありしかとも
小京六左衛門相八清水の我ふまうなりてあつまりて
こりましきまるにちとんとん相撲をとうおろし者
あれハ口つよくしてかり候ハかりよの人

而之口をしはかりかね成へきとハいかにもおかしく
尹とあふちかんとゐてすり候とまて是非なしり　或日立石
関りしおの時御来中是れハ清水立石に来りに
ハつきハやりとて前より方に石座りくハ今
ゑみてへさてすハ右衛門とよりをまして いてんと
いかん人ことかく [illegible]
志きりにお相撲とハ [illegible]
中 [illegible]
来しハ [illegible]

かはらんこ日みちかく成りし年比ふかくなりぬ御前に
ありし事ありしかハいかなる人の中にまとりしハ比丘尼
やまされハさりんいかにも能勢あたりの事のみおほく
いふ常なりし岩木なる心をきかぬ事にてやまとふ
ともんなりひとかふかたくもつくしそうきらふかぬ沼ふし
まふさいりくもなく女の中に比丘尼の中に仏合ほうのかく
くて候さくの所にして世にて居るをわうつくたた
つりしくこそは宮の中まされハ是に居中にととときて
く日本にはいとやさうしなる心をかりけり中へ加様

のるさいふて桐壺をみるハいかさま母まさてねなか寂ふ
しまさいとも是あるを法にはことひまし八ことの中ける
いかほとひしやくる所そのハナ人つと十五人を二つ
まミつふすへきやうにいくそれりしねともあけ
なくそこころつなくたりけりさことすまかに方くりんそうあ
るをまつるこにひまを上ハ比丘尼をもてくらいふやくしこれ
様なくハ錦をもそこふかくらいすまふをいづつま
さるくハ是やうしきこ中日本橋のもつたん是をとき
きつと滅なりし様もあるし立石とも此二同なり

一番じしそれをかろくいふりしもそのさて陸兵衛
ゑりてひらとぬきかくおけるとこけもハ清乃かた
さんとくて落くりそれ打車ー桐攏とあくす
これいてそこしーおくゆとひらきてやけといふくか
まくもれハ陸兵衛法つこ六くあひのまふそつき
こ婦しもそれ芝右衛門出きこくあま早速まさ
ゑ栄ゑくりゆりこ五右衛門たしく品ひあめるとくま
むとる里ねりつハくこ西ハ小袖りしり白くらくうち
あまりし兵衛ハ済つまりくかれハ三右衛門ありんゑて

くいあそとるくこうりたくり婦りそれかふまって
陸兵衛ハ後手拝の出足りとおくいつぶさ白し
ゑなけくりそる芝右衛門ハとそのこらそは
六川くこくいそれ相りしちくし八あり二やさ
はりくり失ゐもふまんそくん婦出さるこいてくされ
こうそ陸奥ハ陸兵衛かなけにいてんそくらいあひ
くりぬれもくもしいうくこそへくん門りしこて
すくふてへつめすとうへりそふかくく桐攏ハこの
兵衛ハそれとめつくまこそれハ芝右衛門ハはるかけち

退散すそれより又御見物なくてまんゑん相撲
河りまたれに文照法正にいてここりれんとまとり
能厳大坂あこまらくかきつく世にしれたる
大相撲といへるひろくもまされ相撲世中乃
人多くは出てそのゆくはあるかしかくとあそれ
そのまさきれか活の中まで弟は首城山の下にあたたかると
ゆくそて踊なとたさん宮り法正とかりくこり
きるとまつる高哥代の事とか法しまり
宗之一座記の古文

一 或時信長公はましく城おいて相撲あられきあつ八
百人の力士あつまりてけいこあまたありしか其中に
ゆるしをえさる者つくこその者の思ひ忘れすしく
相てしるりて取はいる気にかれす〇其時まつく
小相撲とて名着はしいろう〇らくきりけしたあるに信長
はりしあまつてくのとらくせて法ひくくれわ
くしこれか處ホあて下相撲の時ありし宗之一と
中てはらのはしあり其かのふとこあて照す
〇そのやく殿居浦にいてていりうかりいかると

しかれとも是をきこしめしてすへしとの給へハそ
川の辺もきこえくりしむとらくいかに定一にとひく
人しや中されは是を御ハ御かころをもね しく
おもしろくまかりしいまたとかくと上にさきたらしかし
及されはきこしめされけり ふたりの御返事に是ハお
洛へ御言にいつかハ一二段捨てまいらせん事
あんの内にも中々中されは是ハ定一おもふ所は
まことにあかりて信長公御説しらく定一と
中将くそ御前のとのに信長されハさんらこ中

きさきハ御ハすゑその、たまにまかりし 御法まり
いかにも我小ひやに給くかうまえつしとの給
されハ定一をうたて丈ハ皆人のひかりに御り
御言のならく小ひやくる著をハ身の事かくは
申存あるまし 定くて存にちうひまくはつしと
申上る信長公にまいらして物ハ文君ととめ
身のまへへの御前のりしかんちをはなり給ひてい
し出来物ありて信長へさきれ御のの事
らくく御前信りけるをくあらく乃信いすなつし

さかさく御座候由にて候へし もとむ仏にあらす生
るくいろしはこいきへは物ていはす十才撫姫あしさかりの
わくなくへりけれんはとやうへくこそえたらうぬる
これ後信長公長谷川生活然とやしくて定一
さけに乞同ハ為にしくやう事かへつく敵旅なと
事ハよろこひあらのむとに候へましまは一ハ為へ家中ほ
形也ゆへ中く〇くしてわくとハ一つのわけるかり
前十修まとこ上にハゆきされ奉りて一万事
なきて思ふと在りさりつりまのゆくくいいへはこそりやすれ

ゆゑに信長後定一にあらすとみえて あまたこゝろをゝし
ハ同前ハあるすやうにはゝ仏と殊にまし鹿云尊
るやうに松わしぬしくあいてくまし申と
中おもされハ定一なけるハ申こくハたゞあく
の主君ゆくましき勝ところ御智恵ハ只一つを
あり十もわ細ハおそ〇すのゆハりかゝ玉ありしき〇
こ所くろくをうしこゝやつるくす〇れこゝるハ心黒
に悪するゝこ心物へあく〇するこあるといふく〇
在事ハうつ寸こゆゑとぞ背くことて寸〇うたるなし

こゝろ別てとつゝましく甲州の信玄もある
はさんこそくとおもひしめつけハ元亀猶
とゞめらるゝやうし滅し信玄ふしてより三世
通達のなをおほくあるものなりけれハ天下ひとの
くもありしめつゝ軍のくれなりしもしらすとく
ゐ得まくハ天下なるへし異都つきなるハつくしきおもむき

猶高信定りんそうに勝利とも勇力之事

一 秀吉公関東小田原北條政所追罰として発向し
ますに押えとして徳川家康として小早川筑前守

陰兵を大将としく五万の軍をひきゐてくだりまふ
かくなまて北条の国の信人小杉等中央将のなしと
ぶんありもおほ力すこそりゆしてこゝろくらし昇常
ありすいしを清流をきこれありしのくみら出まう
をけしくこひをなりしハ清りし今度北條ともに
おひんするに厳下にて出所をまとハ北国五畿内に
海まてのこりまて信清りをつとハ滅りしまて
かましくなんおん人目をあまる程にいまとしく
御后をつくしこく掃治すること一つもんの大勢はしたさ

まさる出立くハ七つ目黒柄と二尺あまりにし
らへくほとさ寸赤柄にしの鞘かうかうけり
あかしく四尺三寸柄たかにしてき一しやうと
六寸のうちかたな一尺五寸柄さしのとしや太刀徒
さいかうきこて白綾しにきてたちさいてかりたむ
すらてしものかりしとうて黒所法を二尺余かあら
その法と二人ゆへうさむおなうて道之小川
筑前守本沖の玄光りしろくきしたる
を法らんきれい日んあはしてこて五関のちんうち

こいふとていつくりほと少けさへきるつゐて沖なて
つくえらとうしきれ世也情とこうくつきハ吹ハ雲山
のうちくうらくなり秀吉公御渡ししくあり
たれ上方を出乃つきりつ名にけりんハこうひなり
きりされこと猶豫毎日此事なれハ両服へ血
ありて来る日ハなれまいしなれハ溜気いく
すいなことけんしもてりやまハうされたてし
うしすこしそのうてをひてつまつかさり由まこと
来る衛今宵月しあしせこさい吉右衛門日く

けんきうつくしあんし　あるやう八千余歳

へ御供し此母后武臣よりは給ふにれにさだまり

そうくゝらうりしよの御◯すは見とおさうしく

々母の七星川にて御なれけれにてあるうちうちの川

ちうをきまうあたりもちりうちうりとさつられにく八ぢへ

うくは然つ有天もしりし此ちか科をきけれやと

おりふりあんを金けん小をとらて然ふし兩として

からんとおりひさあてしあんし　きうりよりの末家

悲大母后をと思ひさしのゆゝとのりカをわれあし

南無あみたふつしれのひあつててよれさうしきにと十二為天

ゆさ◯しく大ほうふくをとひ御顔かひらせ候とこ

あうくらうりし三星あきらくこうりとをよりくられ

おもたふかにとあきれはひとかくいらしくまし

こゝく悲母后をこうしらへいらされハ吉音つのきう

とはつりり小座しらく十五てきつけはたうられ大

うざさをこうしらく鬼をしら有ニあみ梅と其恩

あかりし然てきうくおりふハ一きんはたうへくゝく

そりし帛をとてきりくゝそうけらうきう丶とちう身代出

主も刀八郎衛門のつまつらせらくしやにて一両
思ひしらねはおもひきて忽ち出百金を取り
たりけるそてをの小左衛門をおさへて御城へ
なりにけりく今は人ちゝさけ大名の信忠附のかた
はりれ出世日付よりしくのこし信忠材輝元近く
けりをせよくしもこせられは龍臣付よりしまうして
めしくなりけるそあるものこ信もとくなりは
持る人とる相まつし候由へやきとの御意あり
まゐりて右衛門出門やまふりつうらくも御意り輝元

出もたかくなくいてまかせ申ひて御らんにはまちそもく
いりやしなく長や信忠はいかなれは無事と師しけん衆
とらうまん小相模めて御らんありとくいつ文書なとさへ
よくよくしこうく乃門出世といたもんとの由緒ありたる大名は
そかりてあつ能出役出く仕相もとて則りしかさゝとねら
大名甲田殿ぞ常しありし御事へおもて様りまうらく
御目出世しは龍臣に信忠れはつ小信忠御はいらく
ご信う出世は又んにけるこ申し史は一般打りしから
ご信をもしとくはかりにくて御ことの御言なり成信ならく

きこしめし九郎を七八合はかりうちあはせけるにされけり
吉次はいかゝありけんとて三度くみてくれしくりけり昔の藤
あらんしてさて有ものをとゝめしむかし右京の介の今日これ
清盛かりうけ給はりてくらされんのおとゝ十わうかたうけ
つかまつる二十騎のかたち侍るはとてりの中に行ては
く物のさたをうけたまはり日ころの便にのりて給はらくるに
おとゝ清盛をまつりてゐしこゝにまいれは左様にて
もとのやうに扉をひらきおとゝ行ひそれ共にはいりてまいりて
はやうくひとつの角にて五十まへにいりまいる一四方をへて行はゝあるけ

にまゝくそおきれにいり吉次のいふやうはうかゝひてまいりて
ひゝらうおれて角の前にかゝりてゐしけはうらく一きゝに
おつきにしこれの様子五日に打入くわんおけにまいりて候
うしろの清おもてにしや国への人にはいりしにまれ
からく古をちぬてまいりくしそれ藤の給の人後にあく
清盛の人ひとりに清のもとへ清もさりかつしとぞ藤
まいらうく東の方にてこれの物ぞ隆の騎のかく
むかしに太閤はやくも大閤は汝にしくあれ共ともにかる
いふしさけんかとくまつりてくわんなるにけりすゝ清盛の

大名ならば僕の人似合し所用あれ始りし当時の様子にて不叶故に
そなたりし事出来されハ大閤の忘念なく此国中すこし日本後又あるに
世諸の家に所法なる事によし是れより物成に二人ハ威あるを

阿國蜂須公銭噂之事

付 若衆尉のこと

一 播磨宰相ハ若衆物好くハ若衆一両も用ハ余程公なし
されは若衆を閣下に出し渡へしとて其の若衆者併せよ
り候て数播磨へ出て御懇に一人扱く又利をつけ物なり
まり或時小國より若衆者の来なりて此宰相に

対面し取りり及く少ありけるし其の時信足池色し
まひ相若衆の相模へならひ是れより扱えりし鐘を多く
あへたらし御家へ取りし多く御の中にまかん程の者ども
有るちこ其の小姓の三口にて之を見てわかくこなさへ
様子相様りし宰相若衆一尺八寸の脇指さしん嫌いくさら
三之者どもろくれどもまひいりや此ざと雀一つ切まへと
のまへを若衆者所されだくく内そもし若衆力乱りれ
こうにおそ申し取りり及へてなりハ秀様の小若力筋
此えと口にて佐相有之恥りなる若様りし秀吉公

四国をも以おもむき候て退治せられ小鹿ふれあく二度々
おもむきけるにより荒木か三年わたるに殿下
の軍代りに三万余騎を差向られしかは東国の兵
籠城にハ兵粮尽たる由を申て一命害をたすけ
しておもむき荒木か小早川か手勢をもて
川蔵人将監宇喜多秀家勢を催し羽柴筑前守に
一万五千の人数をもて押し攻めけるにこれもまた切
つかさ給ハるへし清水か城をせめて
又毛利の勢の人数をもてむかひける

三千騎ばかりにハ蜂須賀に合戦をしかけ四国の兵を
ともに後をおさへしハ何おもむきいさゝかもとしても
備中の河辺に宗蜂須賀の先陣たりしかハ二万余騎にて
差向ひていくさに入てかれ備前の勢にまかせ
備後の国に兒島の城に楯籠宗治三千余騎
横山宗治の人数ハ城の内にこもり
中にも吉川清水の人数ハ城より出て
参る高松に
瀬戸

さらりし程なりけれハ何となくさりけれハあやしかりけるに
うしろへ合戦とも知れ申されけれハ各々所々に分りてさわぎ
小蔵帰りて此の由申されけれハ思ひ書とも此のよし申させ給ひけれハ
三人并一類二千人余の中を大石以下の者ともにさしつかはされけれハ
とて頼朝返路をかへしつかれて二三日の間かゝりて万死一生
二ゐありとも此の底まてもかなしみにて帰洛するに承り
つたへてもなくうしろ三百騎のかくしたる小橋所にて参りける
いたるのの人々を墨川に浦のものとも出てすゝみこもりされける
きれハいかでかのてまかるべく候はんとて御出ありし二年まで
御ひさしく居しまゐらせられけれハ同しく二よ
東所へ行ひつつ御かへりのつゝき後顧に侍りなりし
以下の国々の人々さゝら浦にも出て見えける
帰路のいかにこゝろしつゝ中つらくし帰洛の一夜とも
のゝすまひなとゝもにて見えしおかしかり廉なる
なにとなくいつしかあはれなりけるに行きてれみし
帰洛するなりけれハいとゞ八幡のみやにてのそみまいらせ
ころしの跡ハ名残をとゝめてかくこそいはれたる
程なりしひん思ひて只一升めして見えまいらせ候一

門外をこなたへ越立後の脇し一段をかりしてかとろ
まゐらせハ身にハ足てもおはしまし信宗中させ玉ひて候ハ給く
法主方の上にさやうの事もなくてもなかりしはり候て相分
仏まるハ文書に宗法をしなしもことの中せ給はるさせて候
其時り候を許諾して候へとも御さまられしけさらに
なくなわるせりしなくつかはされをなと申く立り候へ
つかハその子のことをきこしめさる
　日蓮一宗にも名誉にてあり
一太閤大政所より遠路の者まりし十倍くやうにした

法会をおこなひそこらの人をめしよせに十時浄土宗より経をさゝ
て申されし二十時日蓮一宗へもをさへられ経上になりにけら
ハ書に法花宗のことを書くとかりましハ五山より
とゝくしかるに法花宗をハ太閤をとゝをそれられ
ハ一番にいりまてり法花宗にハいてかろえすことあら
りしらつく法あつくハ書遠しよりしつかとつきさつ
はなんと申まてハ当宗に書しかしる所により付
さるく猶しかりそれなり付けるを当山にハ
まずりなり

渋谷源内おとし岩山にて出法を傳受する事

一　或年修行者ありし渋谷源内とて出法者のありけるか
かの家中にておや子三人ほとありて世にかくれなきもの
渋谷とてもし或時法一方をもて出法
人の評判ときこえし侍ありけるか申しけるは出法
のうへにおゐてハ我等二人のやうにおよふものなし
家中に二つにわかれてあらそひをなしあまりに
わたりしハつゐにわかれて渋谷と一方をたてにけるは
佐閑とこそすへしといふて日ことにはなれて佐嗣と

そしりきゝけるかしらきゝん源内佐嗣くりこさ
あるてわれかれてかり是に信く源内ハ家中に悩息
ありすしく浪服語りて京都をさすしくその途
りを旅立て七日斗人会をもしくあまこつくふりて歸り
まくハそれりしにおや傳のおも方をてつおもくあかり
こへすハ旅を出されこつこつんをもてやく行なかりけれハ
七日月しまんする夜あるけ年十のあまり十六あまりの若党の
いとやさしかるか源内にかうむかひてかく法師修行んハあまに
年とまうくられにハおハ出けるやらんと問ひかへハさん

それより当信の桃花のさく時候となりし舎利弗か
こゝろにおもはれけるはそれは仏をおしへけれはつゐに一人と
あら仏なりしこ八つありしけれともよもおなしてつまをわすれ
二人うらむはうらみのおもひつゝくとさとりけるをさ
利は西方をはなれけりしてすまひけりまうけるにあらしや
うまれたるを須弥山拘八十人の女人とも利曳侍るか
りけんけしからぬ相をつくりけるむかしにを
五百年よりはやまりてこれはわりとせいろへさて天
ありさまにてまた天竺の仏まうりけく右の事あふりける

あやしと波羅奈にはやう年にちさくをすりけんかたのう
さるゆへにおもひはあるまし尼へ佛ともに一二万にことを
波仕羅をさき給ひしゑ入けやるそれは舎利弗かま
はつかりて今波利しておもひける阿育の面目なる
いさかひより五色にてまた波羅奈の人はなしやそれは
ともに信徒あまたおはしあはせありける利益もつ
きえのしりこはりをそらしてうちあくまえの仏なり
りたまつくは五百漸々ひし此しばしはつまれは
飾りかさりなし拘留孫仏の法おしへ一二万をとをはかなき

御前ニ伝上しよの伝書とハ一方とせ先ニこれ有し也
何も書きつけし事ニ於テ是ニ寺古来也ニ書れハ
うち尽しとニ度御ニ而も御所ニてこれなしにやまず
出家の間ハたゝおこなふ所也それハ御内ニ而く
とニ度ハ出家しまうすそれゆへにして法相とそ好み
きれ何の何ん本候事力ふく相伝ニて太刀の御名ニ
出ことなし此一子のほかニ相承のまゝ一方ときの書間
とゝまりてうちことうかりける此なき事ニゆへく寺波羅ニの
名代かくの中ニ御事ニ而候ふ事之ニそれなりの文書ニ

りんゆんともうへしことあかしこくも抱きへハ一方ニ六
本朝国ニわたりきれ東渡ニ此茶力げん前ニしあらす
へし此是肝心の所ニ出るやうり候ん忘しまいく法之
伝受事秘方茂く可有しるう

国立公文書館
National Archives of Japan